

解説

私たちはよく街のダニ、盛り場のダニといつた言葉を聞きまゝす。駆除術を根柢にするヤクザたち、それははじめに生きる人たちにしつこくつかつて、そのお金も魂も吸いあげていくからです。しかし、こうした二本足のダニたちは警視庁の研究テーマです。お巡りさんたちは、盛り場を見張つて、ときどきこういうダニどもを採集していただきます。なるほど、自然界のダニの仲間にもこ

うした悪いものもいます。人や家畜の肌に食いついて何日も血を吸いつづけ、はじめは小さな虫体をしていいますが、血を吸うとまるく醜くふくれ上る、マダニやイエダニがそれです。また、古くはつたところからしりやちヨコレートや砂糖から発見されて大騒ぎを起した厄介者もいます。コナダニという種類です。しかし、ダニという動物がこのように悪者ばかりだと思つたら大きな誤解です。

ストーリー

指導 東京大学伝染病研究所寄生虫研究部
佐々 学 松本克彦
三浦昭子 福井正治
製作スタッフ

製作 村山英治
原案 佐々 学
脚本 丸山章治
撮影 塩瀬 幸
高橋 佑次
木島 則夫
編集 長谷川 宜人

協力 農林省家畜衛生研究所
寄生虫第一研究室

科学映画

自然のしくみシリーズ 2

ダニの世界 2巻

古くはつた七味トウガラシの中にダニがわいていたことがあります。このチヨコレートも、だいが古いようで、カビがコナのようなものがついていますが、いやコナではありません。コナダニと呼ばれるダニでよく見ると動いています。コナダニがどんな小さな生き物かは、針の穴の中を大勢でくらくくと通りぬけることができるのも分ります。コナダニは成虫でも、五ミリ以下です。コナダニは、いろいろな菓子や食品にたかります。サトウの好きはサトウダニと呼ばれる仲間、ミソにたかるミソダニ等々。さて、食べ物にダニが発生しても、小さくて人間の眼にはなかなか見分けられません。ダニを分離する簡単な方法があります。たとえば蒸ザラメだったらニグラムほど中姓洗剤の液にとかしそれに飽和食塩水を入れてよくかきまぜると、比重のちがいで表面にダニが浮き上ってきます。

つぎに、ダニの仲間ではよく名の知れたイエダニを紹介しましょう。イエダニも小さくて姿はなかなか見えないうに、私たち人間の皮膚を刺して血を吸うので厄介な奴です。イエダニは天井裏のネズミの糞にわくのです。ですからネズミの駆除が第一です。このイエダニはリンデン乳剤にあらうとすぐ死んでしまいます。ダニは平和な牧場にもいます。牛や馬にたかつかつて血を吸うマダニです。ダニの中で一番体が大きいので、人間には昔から知られています。血を吸うとふくれあがつて小豆粒のようになります。可哀な牛が体をふるった位ではなかなかかはなれません。ダニの仲間でも有名なものにツツガ虫がいます。これに刺されるとツツガ虫病という恐ろしい熱病にかかることがあるのでよく研究されています。ミカンやリンゴやお茶の葉を食い荒らすハダニもいます。ダニの仲間には、まだほかにもいくつもの仲間がいます。この地球上には何万という種類がいてその大部分は人間に害のない小さな動物です。木霊の落葉の下にも(ハササダニ)、水の中にも(ヘミズダニ)います。私たちはこの小さな生き物についてもっともっと調べてみる必要があります。

ダニがどんなふうに見えるか、ケナガコナダニを例にとつて調べてみましょう。ケナガコナダニがわいて古いチーズを、顕微鏡で見ながら細い筆の水サキで卵だけひろい出し、シャーレに移して観察します。ダニの繁殖には、二の度から二五度の温度と七〇%以上の湿度が必要で、こうしておくと三日目ごろから卵の内部に生き生きした変化が起きるのが見られます。そして四、五日で子虫が生まれてきます。子虫は生れるとすぐまわりを生えたカビなどをガツガツ食べるのが見えます。子虫は足は六本です。この子虫は一日か二日につと眠りに入り、つづいて脱皮をはじめます。こんどは足が八本にふえました。オオ若虫です。体も子虫にくらべると倍以上になります。それからさらに二度脱皮を重ねて親虫になるのです。卵から親虫になるまでが十日。そして親虫になるとすぐ一日に平均十箇から多いのは三の箇も卵を生み、これが数日つづきますからどんなにすごい繁殖力か計算してみてください。

さて、ダニがわくのは、五、六月から九月までで、湿度と湿度が大きく関係しています。お断り「この映画の、対策面に出てくるメチルプロマイドやリンデン乳剤という言葉は、一般名(学名)で、商品名ではありません。」

自然のしくみシリーズ 1
ノミはなぜはねる 2巻
科学技術映画祭長官賞
オオ回教育映画コンクール銀賞
文部省選定(小・中・高・成人向け)

16ミリ版黒白2巻 二二三米
映写時価 二〇分
価格 三〇,〇〇〇円